

青年期の自己肯定意識と過去の友人関係に関する調査的研究

山 本 公 美

【問題と目的】 思春期を迎える頃になると、内面的な自己に意識が向かうようになり、自己意識の広がりや深まりが起こる。その中でも、自己肯定意識は対他者関係との関連が強く（管，1975など）、特に思春期・青年期にはその影響を受けやすい（平石，1993）。また、この時期の友人関係は、親から自立し自己を再形成する上でも、重要な位置を占めている（岡村，1998）。このような状況から、思春期の友人関係が、その時期だけでなくその後の自己肯定意識に対しても何らかの影響を与えていると考えられる。

そこで、本研究では、友人関係の発達を小学校、中学校、高校の学校段階に基づいて検討し、大学生の現在の自己肯定意識と、それぞれの学校段階における友人関係との関連について実証的に明らかにすることを目的とした。

【方法】 2005年9月下旬～10月下旬に、大学生・大学院生を対象に質問紙調査を実施した。有効回答数は245名（男子94名，女子151名）、平均年齢は20.37歳であった。

調査用紙は、小学校、中学校、高校の頃の友人との関係がどのようなものであったかを測定するために新たに作成した「友人関係尺度」と、平石（1990）の「自己肯定意識尺度」、および過去の友人関係の具体的な影響を尋ねる自由記述で構成した。

【結果と考察】 過去の友人関係は、遊びや勉強を通して時間を一緒に過ごした関係（遊び仲間）、友だちと行動を共にし、深く結びついた関係（密着した友人関係）、友だちと自立した個人として互いに尊重しあった関係（自立・相互尊重）として捉えることができた。そして、「遊び仲間」や「密着した友人関係」は学校段階を進むにつれて少なくなっていく、「自立・相互尊重」の関係が増えていくことがわかった。

過去の友人関係と現在の自己肯定性との関連は、全体の傾向として、過去に「遊び仲間」、「密着した友人関係」、「自立・相互尊重」の関係をたくさんもつことができた人ほど、現在、自己を肯定的に捉え、安定した自己を築いており、反対に関係をたくさんもてなかった人ほど、現在、自己を肯定的に捉えておらず、自己が不安定であることが示唆された。さらに、男女によっても違いが見られた。

また、本研究において、過去の友人関係は以前から論じられてきた過程を通過していたが、豊かな友人関係を築いてきたとみえる人の中にも友人との間に一定の距離をおいている人がいることがわかった。これは、友人関係の複雑化や、十分な友人関係を築けなかった人の増加を意味していると考えられる。これらのことから、今後は、子どもの頃の友人関係の重要性を改めて見直し、過去の友人関係が元でつまづいている青年をどう援助していくかを考えるとともに、現在の子どもの友人関係に関しても具体的に支援していく必要があるといえる。